



Title	逆瀬氏秘蔵先儒墨跡
Author(s)	木村, 英一
Citation	懐徳. 1982, 51, p. 40-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90602
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

逆瀬氏秘蔵先儒墨跡

積文 木 村 英 一



一、伊藤仁齋

階前離落索尤

新唯有黃花賞

此心秋色潭心相

照處清光一朵杵

喜賓 維楨書

階前の離落索さびしきこと尤もっとも新あらたなり、唯黃花有りて此の心を賞す、秋色潭心相照す処、清光一染嘉賓に杵づく

維楨書

池亭残雨濕葳葳羅
 扇風涼露有華螢
 火不知人暗坐低飛時
 又過窓紗
 蘭洲外史

人日書所見 吾諫年例以此日盡會邑民賜酒食俗稱謂百姓振舞
 一雨東風軟塵四郊歌
 舞湧芳春 堪知今日城中
 舖戶扶歸盡醉人
 渭水思恭稿

二、五井蘭洲

古狂

池亭残雨濕葳葳羅
 扇風涼露有華螢
 火不知人暗坐低飛時
 又過窓紗

蘭洲外史

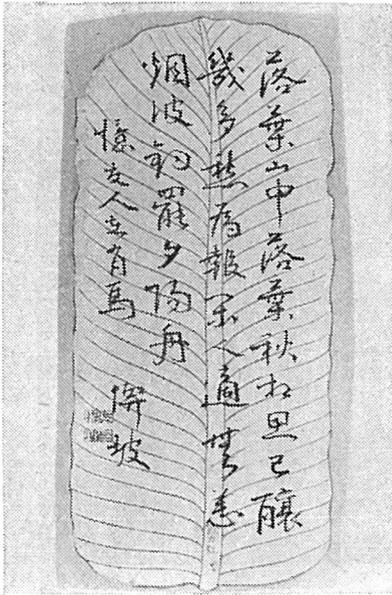
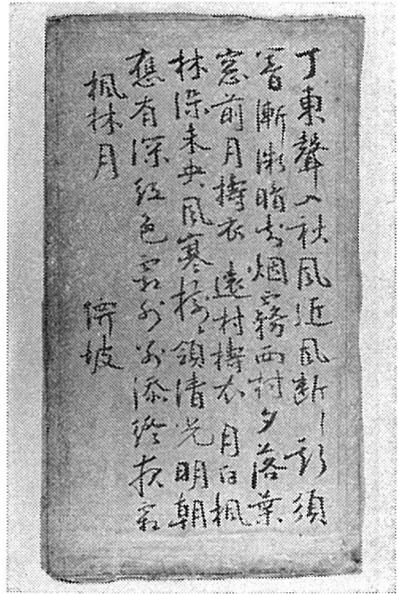
池亭の残雨兼葳葳^ふ、羅扇風涼しく露に華有り、螢火は人の暗するを知らず、低く飛び時に又窓紗を過ぐ

蘭洲外史

三、関 思恭

人日書所見 吾諫年例以此日盡會邑民賜酒食俗稱謂百姓振舞
 一雨東風軟塵四郊歌
 舞湧芳春 堪知今日城中
 舖 戸々扶歸盡醉人
 渭水思恭稿

人日見る所を書す
吾は諫む、年例として此の日を以つて尽く邑民を会して酒食を賜ひ、俗に称して百姓振舞と謂うことを。
 一雨東風軟塵を簇む、四郊の歌舞芳春に湧く、知るに堪へたり今日城中の舖、戸々扶け帰るは尽く醉人
 渭水の思恭稿



四、中井蕉園

丁東聲入秋風近 風斷斯須

闇漸漸 暗知烟霧西村夕 落葉

窓前月擣衣 遠村擣衣月白 楓

林染未央 風寒樹々領清光 明朝

應有深紅色 霜外別添終夜霜

楓林月 僊坡

丁東の聲は秋風に入りて近し、風断えて斯須闇漸々、暗に知る烟霧西村の夕、落葉窓前月に衣を擣つを、遠村衣を擣つに月白からんも、楓林は染むこと未だ染ならじ、風寒くして樹々清光を領けて、明朝には応に深紅の色有らん、霜外別に終夜の霜を添ふれば、
楓林の月 僊坡

五、中井蕉園

落葉山中落葉秋 相思己釀

幾多愁 為報閑人適無恙

烟波釣罷夕陽舟

憶友人在有馬 僊坡

仙坡

落葉の山中落葉の秋、相思ひて己に釀す幾多の愁、為めに報ず閑人適恙無し、烟波釣り罷む夕陽の舟、友人の有馬に在るを憶ふ 僊坡